仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参

信玄、出陣！

斐芝嘉和
挿絵／SAIPACo.

あとみっく文庫

あとみっく文庫／PDF立ち読み版

インターミッション 10
第一章◉邂逅 12
第二章◉アリスと鈴音 24
第三章◉エリザの思惑 45
第四章◉風雲！ 北宮学園 55
第五章◉迷宮狂想曲 79
第六章◉信長の活躍（その1） 89
第七章◉男のコ・女のコ 120
第八章◉信長の活躍（その2） 157
第九章◉錯綜と収束 204
第十章◉少女と触手とスライムと 222
第十一章◉新生徒会長誕生 281

仙獄島三学園／登場人物紹介

北宮学園
KITAMIYA GAKUEN

宇佐美[奈々]定満
熟れた豊満な肢体が魅力の美女。景虎の参謀を務める。能力は相手の能力の種類・強さを測る〈スカウター〉。

長尾[美姫]景虎
「越後の虎」の異名を持つ、ちょっとキツメのお嬢様。能力は目視した相手と自分の位置を変える〈シャッフル〉。

三浦[ウィル]按針
留学生。ある目的を持って景虎たちに近づく。能力は超能力を封じる〈首輪〉の精製。

松永[サキ]久秀
生徒会執行部の一人。表沙汰にできないような仕事を受け持つ。能力は手に握ったものを即席の爆弾にする〈E・E〉。

西開学園

織田[希莉子]信秀
信長の姉で、西開学園の生徒会長。現在療養中…。能力は信長と同じ〈生体スタンガン〉。

羽柴[瑠美]秀吉
信長率いる応援団のマネージャーにして、信長の愛人。能力は他人にまで幸運をお裾分けする〈極度の幸運体質〉。

織田[希莉香]信長
言わずと知れた主人公。美人だが、変な言動が目立つ。前回出番が少なかった分、今回は大暴れ！能力は触れた相手の気を乱す〈生体スタンガン〉。

今川【アリス】義元

信玄と同じく、北宮三大美女の一人。高飛車なお嬢様。能力は射撃系の武器は百発百中になる〈与一〉。

武田【柚菜】信玄

晴信から信玄に改名。確固たる信念を持ち、景虎らと対峙する。能力は自身の気のパターンを変えて能力をコピーする〈エミュレート〉。

北条【鈴音】氏康

信玄、義元と並ぶ北宮三大美女。おっとり系の大和撫子。能力は身の周りの粉体を操る〈粉体操作能力〉。

松平【美幸】竹千代

義元配下の男の娘で、メイド部隊を仕切っている。能力は周囲を虜にする強烈な〈カリスマ性〉。

真田【凛】幸村

信玄の幼馴染みである麗人。信玄を慕い、心配している。能力は紙に様々な能力を付与して使役する〈十勇士〉。

聖ジョウント学園

SEIGIOJOUNTO GAKUEN

天草【茜】四郎

春に入学したばかりの新入生。水着大戦で変な性癖に目覚めたようだが…。能力は様々なものを呼び出す〈召喚術〉。

エリザベート【エマ】バートリー

三回生。ちっこい外見とは裏腹に性格はドS。能力で縄を自由自在に操ることができる。

明智【沙耶】光秀

生徒会役員。真面目な性格が災いして、水着大戦での痴態がトラウマに。能力はその場その時の最善の行動が閃く〈天啓〉。

仙獄島全体図

SENGOKU-ISLAND INFORMATION MAP

◎面積：約80平方km（八丈島より少し大きい）
◎人口：約7,000人（うち、学生約5,000人）
原集落は島の東側に集中（須佐・武速地区）
学園周囲には熱帯性のジャングルが広がっている。

No.

DATE

極秘

調査報告書

太平洋に浮かぶ仙獄島に存在する三つの学園――
西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。そこでは超能力を持つ少年少女たちが
学生自治のもと、青春を謳歌していた。
そんな中、北宮の今川〈アリス〉義元の逆恨みが発端で第一次水着大戦が起きる。
平和なミスコンのはずが、突如現れた触手の化け物によって、
織田〈希莉香〉信長を始めとする学生たちは次々に快楽に堕ちていく。
颯爽と駆け付けた信長の姉の織田〈希莉子〉信秀の助けで事件は終結したかに思えたが、
それはまだ始まりに過ぎなかった――。
その二ヶ月後、北宮学園では生徒会長を選ぶための選挙戦が例年通り勃発。
立候補者は前会長の元就に加え、義元、氏康、晴信の北宮三大美女、
そして長尾〈美姫〉景虎の五名。最も不利だと思われていた景虎が他の候補者と
対等以上の奮戦を見せる陰で、超能力を封じる首輪を精製する能力を持つ不気味な
青年・三浦〈ウィル〉按針が暗躍、学生たちを淫欲の坩堝に堕としていた。
一方、いつも通りの賑やかな日々を過ごしていた信長は、北宮から逃げ出してきた
久秀と遭遇し、按針の能力を知る。超能力を支配する能力に脅威を感じた信長は、
按針を討つために立ち上がるのだが……!?

紅く染まった頬を引き攣らせ、キッと振り返るふたりだったが、その膝は内側を向き、カクカクと震えていた。声は上擦り、吐息は甘い。生来の負けん気で健気に抵抗してはいるが、身体はすっかり堕ちているのだ。

（なんだ、単なる強がりだったのね……）

見抜いた景虎は、心に余裕を取り戻す。大袈裟なほど苦笑して男子寮を振り仰ぎ、

「……済みません。二匹とも、まだ調教途中のバカ犬で、礼儀を弁えていないのです」

慇懃に頭を下げてから、羞じらうお嬢様たちの前へ回り込む。

男子寮の窓に顔を覗かせた生徒たちが、なにをする気だ、と身を乗り出す中――義元と氏康の股間へ、小さな手をスルリ。

「ンぁっ⁉　や、やめてッ！」「く、あ……うぅうっ！」

スカートごと秘部を掴まれた義元と氏康が、立ったまま背を捩り、髪を揺らした。細い膝はますます内側を向き、白く瑞々しい太腿で景虎の手を挟む。腰を引き、首を前に差し出して、景虎の細い身体に寄りかかるような姿勢に。

（い、いけない……感じては、ダメッ！）

（こんなにたくさんの男子の前で、こんな、こんな……ああ、そんなぁっ！）

歯を喰い縛って耐えようとするお嬢様たちだが、ダメだ。

景虎の小さな手は、ふたりの秘裂を確実に捉えていた。細くしなやかな五本の指が布地

の上で芋虫のように蠢き、
「あ……ッ⁉」「うぅンッ！」
敏感な割れ目をまさぐられてしまう。
押し込まれた下着が淫核に擦れ、甘い痺れが湧き起こった。縁をしごかれた淫唇には微弱電流が駆け巡り、恥ずかしい潤みの底で膣穴がキュウッと窄む。
「どうです？　いい仔になりましたか、先輩？」
悶えるふたりを見下ろして薄く笑った美少女は、なにを思ったのか、すぐに手を離した。再びうしろへ回り、お嬢様たちの手首に絡みついていた縄を解く。
（ッ⁉　チャンスですわ……！）
（私たちを、甘く見ましたわね！）
俯けた顔を見合わせ、不敵な笑みを交わす義元と氏康。たとい首輪をかけられていても、手足が自由になれば逃げ出せる――はず、なのだが。
「にゃ……ふぁ⁉」
立ち上がろうとした矢先、義元がストンと尻餅をついた。折り曲げた膝が軽く左右に開き、フリル飾りのついたミニスカートが捲れ返って、お漏らししたようにぐっちょりと濡れた下着が露わに。
いやらしい触手によって肉芯に産みつけられた淫悦が、自覚以上に女体を侵蝕していた

のだ。もっと快感を、もっともっと悦びを――欲情した膣洞が、中庭の端や男子寮の窓に居並ぶ若い牡たちの気配に反応し、じゅわ、じゅわ、と甘酸っぱい蜜を滲ませてしまう。

「な、なにをしているのです、アリス！　は……早く、立ちなさい！」

叱咤する糸目のお嬢様は、震える膝を芝生につき、両手で上半身を起こしていた。おそらくは懸命に立ち上がろうとしているのだろうが、こちらも義元と大差ない。

一晩中犯されていた淫穴の奥に、熱くて太い肉棒の感触が蘇る。欲しい、欲しい、挿入れて欲しい――犯して欲しい、抉って欲しい、突きまくって欲しい――。

高まる欲望に操られ、短いスカートを纏ったムチムチヒップがクイッとうしろへ。氏康が意識するより先に、右へ左へ大きく揺れて――その姿はまるで、発情期の牝犬。

ふたりのお嬢様の淫らな姿に、観衆が潮のようにどよめいた。

中庭の端にいた少年たちが鼻息を荒らげつつ、芝生に俯せになってジリジリ迫る。尻餅をついたまま動けないでいる義元の股間を覗き込もうというのか、それとも、芝生についた細腕の間でゆさり、ゆさりと揺れている氏康の美乳を鑑賞したいのか。

「お、お前たち……私をだれだと思っているのッ⁉　無礼者、下がりなさい！」

ゴージャスな金髪縦カールを揺らして義元が叫んでも、昂奮した若い牡たちは止まらなかった。さらに寄り、羞じらい喘ぐお嬢様たちの横へ回り込む。首をねじ曲げ、背を伸ばして、細いウエストや見事に突き出たオッパイの形、モジモジそわそわ揺れている美尻の

ベストアングルを、ギラつく瞳で捜す。
前後左右を完全に取り囲まれたふたりの美少女は――なぜか、競うようにひとりエッチを始めた。スカートを捲り、狂おしく疼く秘部を下着の上からグチュッと握り締める。濡れた股布に白魚のような細指を添え、熱い割れ目をぬちゅ、くちゅ、にちゅ――。
「な……なにをしているの、鈴音ッ⁉　チャンスですわよ、逃げなさい！」
「そ、そういう、アリス……こそ……あ、あんっ！　私がこうして、男子の気を惹いている間に……逃げてッ！」
己が身を犠牲にして親友を逃がそうという、健気な美少女たち――ではない。
ヒシヒシと迫る男子学生たちの獣じみた視線を受けて、化け物によって産みつけられた淫欲が一気に膨れあがってしまったのだ。
膣奥が狂おしく疼き、秘裂が燃えるように熱くなる。
たちまち勃起したクリトリスが濡れた下着に擦れ、鋭い快感が何度も閃く。
「男子の気は、わ、私が、惹きます……からぁあっ！　早く、早く逃げて、鈴音！」
「だ、ダメ……腰が、抜けて……ぁあンッ！　手が、手が……ぁあンッ！」
スカートが捲れ返るほど高々と美尻を突き上げ、蹲った氏康が甘い声で鳴きながら身をくねらせた。腹の下から太腿の間に差し込んだ手は、真うしろにいる少年を挑発するように、肉畝の形を浮かせた股布を妖しい指遣いで撫で回す。

淫液を吸い込んだ薄布は半透明で、肉畝の火照り具合まで見て取れた。泳ぐようにくねる細指が股布の中央をしごき、ニチュ、クチョ、と小さな音を立てると、その下に隠れている割れ目がわずかに歪み、開いて、淫らな翳(かげ)りの奥に粘膜花弁の紅さが閃く。

その隣では、男子寮に向けて伸びやかな脚をM字に開いた義元が、下着の中に早くも手を挿(さ)し込んでいた。しなやかな細指で秘裂を掻き分け、熱い潤みに直接触れて、

「あぅ、ぁああっ！　観ないで、観ないでぇえっ！」

ゴージャスな縦カールを揺らしつつ裏返った悲鳴を張り上げる。

それでいて、秘処に触れた指は止まらない。

厚みを増し愛蜜を滲ませた肉ビラを、指の腹と硬い爪に挟んで軽く引っ張る。伸びる淫唇に甘やかな痺れが生じ、

「ぁにゃぁうッ！」

思わず開いた唇から仔猫のような声が溢れ出た。引き伸ばされた粘膜花弁が淫液に滑って指先から離れ、弾けるように戻れば、腰がカクンとしゃくってしまうほどの快感が秘裂の内側に炸裂する。

「お嬢様が……僕らの義元お嬢様が、ひとりエッチ、してる……」

「こんなにいやらしかったんだ、義元様って……」

震える膝に鼻息が吹きかかるほど顔を寄せて、夢現(ゆめうつつ)の表情で呟く少年たち。

「ち、違う……違う、違うのッ！」
叫ぶ金髪少女はしかし、指の動きを強める。
右手の中指と人差し指を蜜まみれの花芯に挿し込み、ヌポヌポヌポ――。
左手はクリトリスに触れ、硬く痼(しこ)った肉豆を磨くように、シュッシュッシュッ――。
（ダメ、ダメ……止まらないッ！　こんなにたくさんのヒトに、こんなにジロジロ、見られているの、にぃぃ……ッ！）
（手が、腰が……勝手に動く、動いちゃ、うぅうっ！）
ふたりともおかしくなりそうなくらい羞じらっているが、しかし羞恥は箍(たが)にならない。
男子に見られている、若い牡がすぐ傍にいる――その実感に、牝の本能が容赦(ようしゃ)なく掻き立てられてしまうのだ。
見られていると思えば思うほど、甘酸っぱい牝蜜を滲ませた粘膜花弁が淫らに熟し、灼(や)きつきそうなほど焦(じ)れる。震える指で抓(つま)み、ヌチュヌチュとしごけば、
「ふぁ……あ、あああっ！」
駆け抜ける悦びに背筋が震え、頭の中が真っ白になり――本当におかしくなっていく。
「あ、アリス……いえ、義元さんッ！　公衆の面前で、そんな場所を弄(いじ)って……はしたないですわよ、恥を知りなさい、恥をッ！」
「な……なにを、偉そうにッ！　鈴音だって……ううん、氏康だって！　そんなにお尻を

振りまくって、本当に牝犬のようですわよッ！」

「わ、私は、いいの……です……だってビラビラが……こ、こんなに、熱、くぅ！」

背筋を反らした黒髪の少女が、うしろへ突き出した美尻をクンッ！　とはね上げた。

真うしろに陣取った少年たちの目に映るのは、濡れた下着を巻き込んでいやらしい割れ目に沈み込む細指。

「くぅ、ふぅ……ぁあっ！　ジンジン、するぅうっ！」

生温かな愛液にぬっちょりと濡れた下着の裏地で、敏感な淫唇の縁を何度もしごき、抓み、またしごいて、糸のように細い目から法悦の涙をこぼす氏康。いくらスベスベした絹のショーツでも、こんなに激しく擦りつけていたら繊細な粘膜が傷んでしまう――頭では分かっているのに、やめられない。指がわずかに動くたび背筋に熱い細波が行き渡り、意識が、理性が、桃色の靄に満たされていく。

氏康が淫唇派なら、義元はクリトリス派だった。

「お、お豆……お豆が……あああっ！　こんなに大きく、こんなに硬、くぅうっッ！」

ショーツの中、割れ目の縁に痼る勃起淫核を震える指先で抓み、ビクンビクンと仰け反るお嬢様。制服の胸元でたわわな乳房が重々しく弾み、奔放に揺れて、シャツのボタンがプツン！　プツン！　と弾け飛ぶ。豪奢に渦巻く金色の髪は、頭皮に噴き出す羞恥の汗を吸って艶やかさを増し、男たちの視線を否応なく惹きつける。

「……ごらんいただけましたか、みなさま？」
芝生の上で悶えるふたりのお嬢様を手振りで示し、天使のように微笑んだ景虎が薄い胸を張った。ほんのり桜色に染まった頬が、朝日を浴びて瑞々しく輝く。左右で色の異なる切れ長の瞳は妖しい光を湛え、息を呑んで見守る男子たちの心をガシッと鷲掴みにする。
「これが私に用意できる、精一杯の贈り物です。つまらないモノですが、私のために働いてくださった方に献上いたしましょう」
得意げな美少女の言葉を、いったい何人の少年が聞いていただろう――それぞれのお嬢様の後援会メンバーは、すでにほとんどがカブリツキ状態。手を伸ばせば細い手足に触れられる距離まで近づいて、
「お嬢様の、ぱ、ぱ……パンティ……ああ、なんか濡れてる……いい匂いがする……」
劣情を隠すことなくうっとり目を細める。
「う、くぅぅ……ッ！　け、穢らわしいッ！　見るな、嗅ぐなッ！」
恥ずかしい場所を間近からジッと観察されて、耳の先まで真っ赤になる義元。
しかし、下着の中に潜り込んだ細指は決して止まらない。そればかりかさらに激しさを増し、ストロークを伸ばして、ヌチュクチュと湿った音を奏で続ける。
（感じてはダメ、ダメ……ダメなの、にぃ……どうしてなの？　こんなに恥ずかしいのに、いつもより……す、すごい……ああダメ、ビンビン、しちゃ、うぅうっ!!）

男子に見られているせいか、ただでさえ敏感な肉豆がさらに感度を増していた。軽く触れるだけで電気が走る。指先で抓み、クニッと捏ねれば、

「はひぅ――――っ！」

思わず股間を突き上げて、ビクン、ビクン、ビクン。

「や、やめなさい、義元さん……そんな、はしたない……」

首を捻って隣のお嬢様をたしなめる氏康も、似たようなものだ。愛液にねちゃつく股布をすべて割れ目の中へ押し込んでしまい、Tフロントのようになっている。捩れた薄布にクリトリスや淫唇が挟まれ、秘裂に触れた細指がわずかに動くたび、ピンピンに張り詰めた淫悦の弦が掻き鳴らされて、

「はぅ……くぅ……あぁうぅぅ……ンッ！」

仔犬のような鳴き声が漏れてしまう。

「く、そぉ……ッ！　俺だって、ホントはお嬢様とシたかったんだ！」

「信玄は抜いてくれるって話だし、氏康様だって、きっと俺のオチンチンを……！」

「ホントに犯っていいんだな⁉　犯らせてくれるんだなっ⁉」

目を血走らせて迫る少年たちの中には、義元や氏康の後援会メンバーでない者が、すでにちらほら混じっていた。

「晴信さんが犯らせてくれるっていう噂は、いまいち信用できないけど……」

「こっちのお嬢様は本当に犯れそうだな。ちょっと参加してみるか」
スケベ心を剥き出しにして、羞じらうお嬢様たちの自慰をじっくり観察。
思った以上の喰いつきだ。
「あ、まだ触れてはダメ！　手柄を立てたら、ですよ！　私が生徒会長になった暁には、このふたりを功労者用の便女にすると公約します！」
叫ぶ景虎の顔に、こらえようのない笑みが浮く――と。
「ふ、触れなきゃいいんだな⁉」
最前列にいた少年がいきなり立ち上がり、ベルトを弛めて、ギチギチ軋むほど勃起した淫棒をそそり勃たせた。ギョッとした景虎が声をかける間もなく、少年は己の手で逸物をしごき――びゅくっ！　びゅぱっ！　びゅるるっ！
四つん這いで喘いでいた氏康の顔に、青臭く香る白濁液を浴びせかける。
（うわ、汚い……ッ！）
我がことのように顔を顰め、逃げるように身を引いたオッドアイのお嬢様は――意地悪なことを思いつき、ムフッと笑う。紫色に輝く長い髪をふわりと広げて男子寮を振り返り、いまだに躊躇っている少年たちに、
「長尾〈美姫〉景虎の後援会に入ってもよい、と思われた方は、このいやらしい牝犬たちに精液を浴びせてください！　一種のマーキングです。さあ、遠慮は無用ですよ！」

朗らかに呼びかけた。
途端、鯨波のようなどよめき。
自慰する美少女に精液をかける――冷静に考えればかなり虚しい行為だが、しかし、昂奮の最中にある若い牡たちにはそれだけで十分なのだ。
獣のように吼えた少年たちが、ふたりのお嬢様の周りへ我先にと駆け寄る。
「ああ、イヤ……やめて……」「ダメ、ダメ……汚いッ！」
怯えながらも自慰を続けるふたりの美少女に真っ赤な亀頭を向けて、狂ったように、激しくしごき立てる。
ビュククッ！　と迸った白濁液が、義元のゴージャスな金髪にべっとり貼りついた。
糸引きながら滴るダマが、四つん這いになった氏康の尻に粘つき、制服を汚す。
たちまち立ち込める濃密な精臭。髪を濡らし頭皮に染みて、頬や額をダラダラと垂れ落ちていく熱い粘液。
（ああ、精液……精液、がぁ……）
（こんなに、熱くて……こんなに、たくさん……）
化け物に犯されて淫獣に堕されていたふたりのお嬢様にとって、それは甘露以外のなにものでもない。イヤ、ダメ、と口では拒んでいるのに、熱い滴を浴びるたび、頬が恍惚に蕩けていく。唇に触れた粘液を無意識に舐め取り、口一杯に広がる苦しょっぱい味にうっ

とりと微笑んで――。

「くぅ、あ……ああっ！」

叫んだ義元が仰向けに寝そべり、ショーツの中に挿し込んだ手ごと、股間を激しく突き上げた。ココへかけて、ココに挿入れて――言葉よりも鮮烈な、いやらしいゼスチャー。

その隣では氏康が、四つん這いになった背を震わせ、

「はぅ、あぅ、あぅぅ……ッ！」

見えない牡犬に犯されているように空腰を打ち、頬を淫らに赤らめて、ひとり勝手に昇り詰めていく。

赤らんだ額に、蕩けた頬に――びゅくっ！　びゅぱっ！　どぴゅぴゅっ！

喘ぐ唇に、揺れる乳房に――びゅるっ！　びゅるっ！　ビュククッ！

四方八方から絶え間ない射精を受けて、頭の天辺から爪先までおぞましい白濁液にまみれていく義元と氏康。

「うぅぅ、あぅう、ぁあああッ！　イく、イくイく……イッくぅうっ！」

「わ、私も……ぁああ、飛ぶ、飛んじゃ、ああ、ああ……あひぃぃぃ――――ッ!!」

ようやく果てたときには、髪も顔も制服も、尻も太腿も膝も脛も――青臭く香る粘液に覆い尽くされ、ドロドロのグチョグチョになっていた。

「ンは……あもっ！　ンちゅっ！」
頭を撫でられ、素直に喜んだ美少女は、自ら首を伸ばして真っ赤な亀頭を咥え込んだ。滑らかな表面に唇を這わせ、カリ首に舌を這わす。
「むちゅ、ちゅ……ンもっ！」
唇を締めて肉棒を搾りつつ、頬が凹むほど強く息を吸って、猛る男根を喉奥まで吸引。
生臭い淫棒に、口腔がたちまち埋め尽くされた。熱い硬さに圧し潰された味蕾には甘辛い牡エキスの味がじんわりと染み、
（お、おち、んち……ンぅうっ！　お口の中に、おちんち、ンぅうっ！）
涙に濡れた切れ長の瞳がうっとり細められる。
「ンぉ、ンちゅ、ちゅ、ちゅ……むちゅぅうっ！」
左右の手にそれぞれ淫棒を握り、口にも一本頬張って、幸せそうに微笑む黒髪の美少女。肩に羽織った学ランも厳めしさを失い、桜色に火照った女体の瑞々しさ、可憐で華奢なボディラインを強調するだけ。
（美味しい……美味しいッ！　おちんちん、美味しいッ！）
舌を磨り潰して喉奥を抉るたくましい男根は、味醂干しに似た甘辛さ。猛る亀頭のプリプリとした舌触りも、ずっと舐め回していたくなるほど気持ちイイ。
むちゅ、ちゅぱっ、と卑猥な音を立てて淫棒をしゃぶるたび、頭の中が真っ白になる。

硬い肉瘤に咽喉蓋を抉られ、食道粘膜を犯されるたび、身体の芯に淫欲の炎が燃える。
「ぇお、ン……じゅちゅっ！　ぷはぁっ！　おいふぃい、おいふぃいよぉおっ！　おてぃんてぃん……らい、しゅきぃいいっ！」
一旦ペニスを吐き出して舌足らずな声で叫んだ信長は、細い腰を捻り、たわわな乳房を弾ませた。あまりの快感にジッとしていられず、背後から抱き締められた女体が、上下に跳ねるように動き始める。
ぐっぽ、ぐっぽ、ぐっぽ――出入りする肉棹に尻穴が鳴ると、紅く熟れた秘裂から蜜の塊が噴き出してきた。いまだに空のままの膣穴が粘膜隔壁越しに揉み潰され、奥に溜まっていた淫液が絞り出されているのだ。
「おい、見ろよ。ミス仙獄のオマ〇コが涎を垂らしてるぞ」
「あんまり焦らしちゃ可哀想だ。だれかぶち込んでやれよ」
周りの少年たちが、なにか言っている。
よく分からないが、嘲笑われているような気がする。
しかし、痺れるような肛悦と味蕾に染みる牡肉の味に朦朧としている信長には、もはやどうでもいいことだった。
「ンぅぅっちゅぅうっ！　ンぱっ！　もっと、もっとぉおっ！　もっと挿入れて、もっと突いてッ！　おいふぃい、おふぃんふぃん、もっともっと、もっとぉおっ!!」

唾液まみれの男根を口から吐き出し、真っ赤にむくれた亀頭に頬擦りしながら鼻にかかった甘え声で叫ぶ。握り締めた淫棒をしゅっしゅっ、しゅっしゅっとしごき、身を捩りながら上下に跳ねて、尻穴に咥え込んだペニスに悦びを与える。

「しょうがねえ、挿入れてやるか」

ニヤニヤ笑った少年が、大きく左右に開かれた伸びやかな脚の間へ入り込んだ。

「あは、あは……おふぃん、ふぃ、ンぅうっ！」

膨れあがる期待に涙をこぼし、カクンカクンと空腰を打つ美少女。延々と焦らされ、じっくりと嬲られていたために、男根恐怖症などどこかに吹き飛んでしまった。

「奥まで、奥まで……早く、突いてぇえっ！　奥が疼くの、おかしくなるのぉっ！」

背後から抱き締められた身体を揺らし、汗に濡れた長い黒髪を振り乱して、早く早くと駄々っ子のようにおねだり。

「コラ、ジッとしてろよ。そんなに動いたら挿入れられねぇだろうが」

苦笑した少年が自らの逸物を握り締め、角度を決める。赤々と輝く亀頭の先を蜜まみれの秘裂に向け、茹だったように紅い割れ目に尖端をソッと押し当てて――。

「な……なにノロノロしてるんら、よぉっ！」

待ちきれなくなった信長が、舌っ足らずに叫んで自ら腰を突き上げた。

ぐぶちゅ！　ぐちゅちゅっ！

猛々しく怒張した肉塊が潤んだ淫唇を掻き分け、すっかり熟れた膣穴に潜り込む。押し込む少年と迎え挿入れる美少女の動きが相俟って、淫棒は一気に根元まで。

「はぅッ!?　あ、あああ！　太い、硬い……熱いぃいっ！」

突き進む肉クサビに膣襞が磨り潰され、稲光のような快感がパチパチ弾けた。

（こ……これが、ペニス……これが、おちんち、ン……！）

肛悦など、比較にならない。

男根を打ち込まれた肉穴が燃え上がり、悦びの熱風が背を駆け抜けて――。

「にゃ、あ、あぇぁぁぁあああ――――ッ！」

全身をピクピクと震わせて、たちまち軽い絶頂。

猛々しく怒張した亀頭に膣奥を抉られ、淫欲の溶岩を溜めた子宮が圧し潰されたのだ。

遙かな虚空（こくう）へ、意識が吹き飛ぶ。

全身の毛穴が一斉に開いて、甘酸っぱい牝香の霧を噴く。

いっそう硬く、いっそう紅く、弾けんばかりに膨れあがる淫核や乳首。切れ長の瞳は恍惚に潤み、紅く染まった頬は妖しく弛んで――淫らな微笑みを浮かべた唇の端から愛液のような涎がトロリ、トロリ。

（い……イけた……挿入れられただけで、イッちゃった……）

延々と続く淫欲の嵐から解放され、身も心もトロトロに蕩けてしまった信長だが――し

かしもちろん、終わりではない。
「なに勝手にイッてんだ、ああっ⁉」
「う、あっ⁉　ま、待て……待って……ああ、ひぃっ⁉」
牡肉に触れて媚薬の効果が薄れたのか、先ほどまではまったく感じなかった嫌悪や恐怖が不意に蘇った。
群がる少年たちが、怖い。
胎内に感じる熱い太さが、気持ち悪い。
「ぬ……抜いてッ！　やめて……いやぁあっ！」
わずかに戻った正気が、普段は勝ち気な美少女をか弱い乙女に変えた。艶やかな黒髪を振り乱し、細い腰をくねらせて、男たちの手から逃れようと必死にもがく。
しかしそれは、猛る牡たちを余計に悦ばせる反応。
「テメェから誘ったんだ、俺たちを満足させるまで許さねぇぞ！」
膣と尻穴を犯した少年たちが獣のように吼えて、急に突き込みを早めた。
ぐぽちゅ、ぐぽちゅ、と抉られる直腸。
わずかに腰を捻り、播り粉木のように旋回する亀頭に奥底を掻き回される膣洞。
「ぁあ、らメ、らメぇえっ！　そんな、激し……すぎぃいっ！　オマ〇コ、お尻ぃ……溶けちゃう、壊れ、ちゃうぅううっ！」

恥辱に赤らむ頬に涙をこぼし、縺れる舌で懸命に叫びながら、長い黒髪をイヤイヤと振り乱す信長。

怖い、おぞましい――なのになぜか、気持ちイイ。

灼けた鉄の棒に、繊細な双穴を滅茶苦茶に突きまくられているようだ。異なるリズムで出入りする剛直に粘膜隔壁が圧し潰され、磨り潰されて――。

「ふぁ、あ……あっ⁉　な、なに、なに……なんれぇぇえっ⁉　なんかヘン、ヘン……ヘン、らよぉおっ⁉」

生まれて初めて体験する、凄絶なまでの快感。

恐怖や嫌悪はハッキリと感じているのに、

「う、浮くぅうっ！　飛ぶ、飛ぶ……飛んじゃ、うぅうっ！」

よがる女体を止められない。

激しく突きまくられているふたつの肉穴から脳天に向けて、鮮烈な電流が何度も何度も走り抜けていく。弾ける閃光に意識が切り刻まれ、なにがなんだか、もう分からない。

「やぁ、やぁ、やぁあ……ッ！　おかしくなりゅ、おかしくなりゅぅう……あひっ⁉　ひぁ……ぇあああっ！」

胸先と股間に炸裂する、いっそう強い火花。

小指大にまで膨らんでいたクリトリスと乳首が、武骨な指に抓まれ、キュッキュッとし

ごかれたのだ。
「いへぁ、ぇあ……にゃひぃいっ⁉　あ、あっ！　あにゃぁあああ……ンぇもッ⁉」
叫ぶ口に肉棒がねじ込まれ、喉奥を犯される。
「ンぷっ⁉　ン、ぇンぉ……ッ！」
気が遠くなるほどの息苦しさ――なのに、一突きされるたび嫌悪が溶ける。
口腔を占拠したおぞましい牡肉が、なぜか愛おしい。
（こ、これが……これが動くと、気持ちイイ……イイ、イィ……オチンチン、イィッ！）
尻穴を抉られるたび、背筋に熱い波が駆け抜ける。
膣奥を突かれれば身体の芯に炎の柱が燃え立って、抽迭に捲れ返る壺口が甘く痺れ、硬く太い肉茎に磨り潰された膣襞に快感の火花がパチパチ弾ける。
媚薬の効果は薄れたが、めくるめく肉悦に翻弄されて恐怖や嫌悪も薄れてしまった。
（イィ……イイ、イィイよぉぉおおッ！　のども、おま〇こも……おしりも、おっぱいも……クリクリ、もぉ――――ッ！）
陵辱の悦びに翻弄され、法悦の涙をこぼすだけ。
三穴を犯されてよがり悶える美少女の、あまりにも淫靡で艶やかな姿に、
「なんていやらしい顔だ。クソッ！　もう我慢できねぇっ！」
「ミス仙獄なら、どこでもいいや！」

順番待ちしていた少年たちが理性をかなぐり捨てた。ある者は揺れる黒髪を手で掬い、己の肉棒に巻きつける。別の少年はくねる脚にしがみつき、しっとり汗ばんで桜色に輝く伸びやかな脛に、勇ましく怒張した男根を擦りつける。

ただの柔肌ではない。

身体中、どこもかしこも妖しいクスリによって感度を高められ、クリトリスに勝るとも劣らぬ性感帯に作り替えられている。

（あ、あ、あああ……おちんちん、おちんちんぅぅッ！　か、からら、ぢゅうに、らくしゃんの……おてぃ、んてぃ、んぅうっ！）

全身から湧き起こる淫悦の荒波に脳を洗われ、思考まで舌っ足らずになってきた。

なにがなんだか分からない。

気持ちイイとしか思わない。

「ン……ぷふぇっ！　ぷぁっ！　ああ、ああ、ああああっ！　イくイく、イくよぉ、きりか、また、イッちゃうよぉおおッ！」

「おお、イけッ！　思う存分イきやがれッ!!」

「にゃ、あ、あにゃぁあああっ！　ひぁ、にゃひ……にゃぁあああ――――――ッ!!」

――びくんっ！　びくくんっ!!

涙と涎でグチョグチョになった顔をはね上げ、鋭く反り返る黒髪の美少女。

意識は絶頂の遙か彼方まで吹き飛ばされ、真っ白に灼き尽くされて――。

――びゅくっ！　びゅぱぱっ！　びゅるるっ！

どぴゅっ！　どぴゅっ！　どぴゅぴゅっ!!

恍惚に痙攣する信長を祝福するように、膣や尻穴、口の中で、あるいは仰向いた顔に向け、あるいはしっとり輝く黒髪に向けて――無数の男根が、一斉に白濁液を噴いた。

「あ……あ、はぁ……」

熱いダマを額に受けて、美少女の頬に蕩けた笑みが浮かぶ。

ドロリと垂れた白濁液が形よい鼻筋を避けて頬に垂れ、弛んだ唇へ――自然に伸び出した舌が、青臭く香る粘液を舐め取る。口一杯に広がる濃密な牡エキスの味に、嫣然とした笑みが深まった。

艶やかな黒髪に乗り、頭皮に粘つく熱い精液。

細い顎から垂れ、汗ばむ乳谷へツウッと伸びる白濁液。

全身に浴びせかけられた臭液は妖しい媚薬の効果を薄めるはずだが、信長は微塵の嫌悪も感じない。柔肌に擦り込まれた催淫クリームがあまりにも大量だったため、顔や口、膣や尻穴に射精されても、完全に中和されなかったのだ。

それに加えて、絶頂の余韻。

クスリによる欲望と女体本来の欲求が混じりあい、咽ぶほどの精臭を好ましく思う。

「おっと。怖い顔しないでください。これでも私は、お嬢様の旦那様なんですから」
「な……なにを、バカな……」
ニヤつく青年の言葉に、絶句する定満。
しかし、いやらしい化け物に背後から抱き上げられたお嬢様は、涙と涎を垂らしながら淫らに微笑んで、
「そぉ……らのぉ……美姫と按針は、けっこん、しちゃのぉ……」
おぞましい言葉を肯定する。
「け、結婚って……お嬢様、しっかりしてくださいッ！　その男に、いったいなにをされたのですかッ⁉」
「ンん？　なにって……やらぁ、さらみつのエッチィ……きまってるじゃない、きもちイイことよ……お尻の穴にね、オチンチンをね、ぐぽぐぽ、されてぇ……あっ⁉　あン、ああっ⁉　ら、らめらめ、按針……らめぇえっ！　さらみつが見てる、見てるぅうっ！」
突如裏返った声を張り上げ、お嬢様の細い身体が上下に跳ね始めた。
ぬぽッちゅっ！　ぬぽッちゅっ！　ぬぽッちゅっ！
出入りする淫棒が景虎の尻穴を抉り、捲り返し、穿つ。いつからそうされているのか、あどけなかったはずの排泄孔はおぞましい肉棒にすっかり慣れて、
「はぅ、ああ、あにゃぁああ……ンッ！　お尻、溶ける……お尻ぃィイいッ！」

幼気なお嬢様を狂ったようによがらせる。

（お嬢、さま……私の、大切な……景虎、お嬢様……）

あまりにも変わり果てたお嬢様の姿に、定満は絶望した。碧と金色の瞳はもはや、なにも映していない。冷たいほど清らかだった微笑みは跡形もなく消え、代わりに浮かんでいるのは淫靡な媚笑――。

命よりも大切なお嬢様が、壊れてしまった。

もう戻らない。なにをしても無駄だ。四年間の努力が水泡に帰した――鉛のように重い絶望がじわじわと背に這い登り、わずかに残っていた理性が掠れて消える。

あとに残るのは――欲望。

清く正しく美しいお嬢様を滅茶苦茶に穢してみたいという、獣の想い。

（元にはもう、戻れないのなら……いっそ、私の手で……そうよ、そうだわ。お嬢様を最初に見つけ、ここまで見守ってきたのはこの私なのだから……）

お嬢様を堕落させる権利も、私にこそあるはずだ――お嬢様だって、私にされるのなら悦んでくれるはず――。

身勝手な思いを秘めて見つめるのは、景虎が自らの指でヌチュクチュと掻き回している幼気な秘裂。鮮やかなサーモンピンクのプリプリとした淫唇が、いかにも美味しそうだ。米粒ほどの淫核が熱いキスを求めているように、ピクン、ピクン、と震えている。

「か、かげとら……さまぁああっ！」
淫らな衝動に駆られた定満は手足に絡みついた触手を引きずりながら、按針に抱え上げられているお嬢様の腰に夢中でしがみついた。
「うぉっと⁉」
脆弱な手足しか持たない疑似青年は耐えられずに尻餅をつき――。
「にゃうンっ⁉」
イボつき巨根に尻穴を抉られた景虎が、細い背筋を反り返らせてビククッと痙攣。
低くなったふたりの腰を、定満は必死に抱き締める。あどけなく小便臭いお嬢様の割れ目に口を押しつけ、舌を伸ばして、
「あにゃ、ああ、ひぃいっ⁉　やらやら、さらみちゅ……やらぁああ！」
瑞々しい膣孔を穿るように舐める。
（ああ……おい、しぃ……これがお嬢様の、味……）
見た目はあどけないのに、割れ目の奥の牝粘膜はすっかり熟しきっていた。
小さくて襞の淡い、耳朶のような淫唇には、たっぷり滲んだ甘酸っぱい媚液。舌にねっとり粘ついてくる。漂い昇る牝香は咽びそうなくらいに濃く、芳醇。針の穴のように小さな尿孔を尖らせた舌先でピトピトさせれば、甘くしょっぱいお嬢様のオシッコの味。
「らめぇぇ、らめや、よぉぉ……美姫、おもらししちゃのぉお……きちゃないよ、さらみ

ちゅ……美姫のおま○こ、きちゃないょお……！」
「ンちゅ……ぷは……そんなことはございません、お嬢様……れちょ、むチュッ！　お嬢様のいやらしいお汁に、オシッコの味は、絶妙な塩加減……大変美味でございます」
羞じらう美少女の股間に顔を埋めたまま、上目遣いに微笑みかける定満。獣に堕ちた美女を祝福するように、膣と尻穴に潜り込んだイボイボ触手が、
――じゅぼぼっ！　ぬじゅじゅっ！
激しく前後する。
「うぅ、く……ぁああっ！」
プリプリした肉イボに膣穴と尻穴を次々に弾かれ、定満は長い髪を振り乱して反り返った。だが、景虎のほっそりとした腰は放さない。むしろさらに強くしがみつき、喘ぐ唇を幼気な秘裂に押しつけて――じゅるっ！　じゅちゅちゅっ!!
はしたない音を立て、膣洞に溜まった瑞々しい愛蜜を激しく吸い上げる。
「りゃっ!?　ひ……ひぃいっ！」
流れ出ていく淫液に膣襞を撫でまくられ、景虎が薄い胸を反らしてビククッ！　と痙攣。弾ける悦びに尻穴が締まると、深々と潜り込んだコブだらけの触手が悦び――。
――ヴヴヴヴぅぅンッ！
「あぅあ、あぅ、やぇぁあああッ！　お尻、溶ける……蕩けちゃうぅうっ！」

細かく激しい快感振動。
裏側から揉みくちゃにされた膣には新たな愛液が溢れ、突き揺すられた子宮には淫欲の溶岩が沸騰する。
「らぇ、らぇらぇらぇえええっ！　気持ち、よ、す、ぎぃいっ！」
碧と金色の瞳を仰向かせて、ビクビク震えながら法悦の涙を流すお嬢様。だらしなく開いた唇からは愛液のような涎が溢れ、恍惚の朱に染まった頬は淫らに弛み――と。
「ああ、こんなところに、穴が……」
のたうつ触手を掻き分けて、上擦る吐息をこぼす信玄が、ふらりふらりと揺れながら現れた。その左右には、信玄に疑似ペニスを握られた、義元と氏康。
景虎の頭の先から現れた北宮三大美少女たちは、三人とも、湯当たりしたように頬を赤らめ、はぁ、はぁ、と艶めかしく喘いでいた。三つ巴で互いの肉穴に「挿入れッコ」しあい、イきまくったからだが、いまその穴は――膣も尻穴も、太い触手に犯されていた。
三人とも、ふたつの淫穴をイボつきの淫棒に貫かれ、グチュポグチュポと掻き鳴らされている。肉芯に刻み込まれる悦びを表しているかのように、股間には異形のペニスが屹立し、その尖端には熟したプラムのような亀頭が赤々と輝いている。
「あ……貴女たち、ソレ……どうしたのっ⁉」
美少女に似つかわしくない巨根を目の当たりにして息を呑む定満に、

「えへへ……イイでしょう？　ちゃんと射精もするのよ」
金髪のお嬢様が蕩けた笑みで答える。
「しょ、触手が……集まって……アレに、融合して……はぁ、ふぅ……すごく、気持ちイイの、おかしくなり、そう……なの……」
義元より詳しく説明する信玄だが、かといって、ほかのふたりより理性が残っているというわけではない。熱っぽく潤んだ黒目がちの瞳は、先ほどから景虎お嬢様と定満の口を物欲しそうに見比べている。
「穴が……ふたつ……どちらに挿入れよう、かしら……」
触手が撚りあわさってできた巨根は、すでに限界以上。真っ赤な亀頭は痛いほどに怒張し、早く射精しなければ爆発してしまいそうだ。
「挿入れるって……まさか、そんなっ！　ダメよ、許しません！　そんなおぞましいモノ、お嬢様のお口に挿入れるだなんて……」
「お、おぞましいって……失礼、ね……先輩だって、ほら、立派なのが生えてる、のに」
「え……あっ⁉」
氏康に指摘され、ハッと見下ろせば――いつの間にか、確かに生えていた。
木の根のように捻れた肉棹、雄々しくエラを張り出した亀頭。色は艶々と輝く黒。天を衝かんばかりに反り返ったソレは、淫茎に肋のような筋を幾重にも浮かせ、まるでエイリ

アンのような――。

「お……オマ〇コ、も……空いて、る……」

淫靡な笑みを浮かべた信玄が、ふらりと一歩、前へ。握り締めていた義兀たちの疑似男根を放し、仰向けになって喘いでいる華奢な景虎へ覆い被さろうとする。

「だ、ダメよッ！　ダメッ！　お嬢様は、私のモノなんだからッ!!」

乳房を弾ませて膝行した定満が、信玄を突き飛ばしてお嬢様に覆い被さった。

（だれにも奪わせない！　お嬢様は……景虎様は……わ、私の、モノ！）

脱力した細い脚を掬うように押し広げ、定満は生えたばかりの巨根をお嬢様の秘裂に向けた。マシュマロのようにプニプニとした幼気な肉畝に黒光りする亀頭を添え――体重をかけて、一気にねじ込む。

「ひぎっ!?　い、いや……痛いいいっ！　らめ、さらみちゅ……無理、無理らってばぁああッ!!　そ、そんな太いの、そんな硬いの……美姫、壊れちゃ、うぅうぅっ！」

ただでさえ小さな膣穴が、いまは尻穴に潜り込んだ按針の淫棒に押され、さらに狭まっている。そこへ、黒檀で象られたような硬く太い逸物が、力任せに押し入っていく。

「ひぃ、ひぃ……痛いいっ！　裂けちゃう、裂けちゃうぅうっ！」

「お、お許しください、お嬢様……さ、定満は、もう……ああ、お嬢様の熱いヌルヌルが、お、オチンチンの先に……き、気持ち……イイッ！」

ただでさえ敏感なクリトリスの感覚が、巨大な肉棒全体に拡張されているのだ。その激感は、美女参謀の理性を一瞬のうちに吹き飛ばしてしまった。

熱くヌチョヌチョしたお嬢様の粘膜に、猛る亀頭を擦りつける。

クサビ形の尖端が小さな蜜穴を穿ち、こじ開け、ムリ、ムリ、ムリ――ズズンッ！

「ひぎゃっ⁉」

硬いエラが壺口を弾いて、景虎の胎内へ。

いまにも死にそうな顔で泣き喚いていたのに、声が途切れ、息が上擦る。

お嬢様の細い背筋を打ち抜いたのは、激痛混じりの悦感だった。身体が真っ二つに裂けてしまいそうなくらい痛いのに、なぜか気持ちイイ。細い眉根が苦痛と恍惚の狭間（はざま）で歪み、開き、また歪み――。

「う……あ、ああ、あああああ……ッ！」

ぐ、ぐぐ――ぐじゅじゅぷぷっ！

恐ろしいほど太く長い定満の巨根が、たっぷり溢れていた愛蜜のぬめりに乗って幼気な膣穴に一気に潜り込む。

覆い被さった定満の下で、小柄な景虎がピクピク震えながら薄い胸を張る。頭が逆さになるほど反り返るのは、膣と尻穴に潜り込んだ硬い巨根に粘膜隔壁を磨り潰され、強烈な快感が湧き起こったから。

（こ、これが……お嬢様の、おま、○……コ……熱い、狭い……ヌルヌルして、しかも、細かなプリプリが、小さく、震えて……）

生まれて初めて体験する男根の悦びに、うっとりと目を細める定満。

その胸の下では耳の先まで真っ赤になったお嬢様が、声にならない声を微かに漏らし、池の水面に顔を出した鯉のように、口をパクパクさせる。焦点を失い、涙に濡れる瞳。とめどなく溢れる涎と鼻水が、淫らに弛んだ頬を濡らす。

本人はまったくそんなつもりではないだろうが、喘ぐ美少女の顔は見下ろす信玄たちの目に、まるでおねだりしているように映った。

「も……もうダメッ！　我慢できないッ！」

切迫した声を発し、定満を無理矢理起こす信玄。

「あ、貴女、なにを……ダメッ！　お嬢様は私のモノなのッ！」

珍しくワガママを言う美女にたわわな乳房を押しつけ、強引に身体をねじ込んで、

「ああ……き、亀頭に、息が……ああ、唇が……ッ！」

景虎の頭の先から巨大な疑似男根を突き出して、

「ンもっ⁉　うプ……ン、ン、ぇあ、あぶぽっ⁉」

野苺のような唇に猛る肉塊を擦りつけ、力任せに押し込む。

頭が逆さになっていたため、景虎の口腔と喉はまっすぐになっていた。抗う舌を押し退

けた逸物は、咽喉蓋を抉り、一気に喉奥まで。
「わ……私のお嬢様に、なんて、ことをっ！」
「いいじゃない、減るモノじゃ……なし……ッ！」
華奢なお嬢様の膣と喉を犯した美女と美少女が、淫棒の悦びに息を乱しつつ掴みあいの喧嘩を始めた――が、どちらも触手に双穴を抉られている。身体の下で「むぅ、むぷぅ」と呻いている景虎と同じくらい、肉悦に溺れている。
最初は互いの髪を掴み、激しく揺さぶりあっていたのに、すぐに頬を摺りあわせ、大きな乳房を押しつけあって――。
「あ、ああ……景虎さんの喉、が……オチンチンに、気持ち、イィ……」
「お嬢様を犯しておいて……そ、そんな、いやらしい顔……しない、で……はぁ、うぅ」
「ン……くぅぅ……さ、定満さん、こそ……ンちゅっ！　ぷはっ！」
「むちゅ……ンちゅぅうっ！」
芳しい吐息をこぼす唇をどちらからともなく重ねあわせ、互いの唾液を啜りながら、しなやかな舌をいやらしく絡める信玄と定満。両手は吸い寄せられるように相手の乳房に伸び、柔らかな重みをムギュッと揉む。左右から寄せあわせ、
「ンふ……ふぁっ⁉　ああ、オッパイ、オッパイがぁぁ……」
牝汗に蒸(む)れた乳谷がムキュ、ムキュ、と音を立てて擦れあう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

仙獄学艶戦姫 NOBUNAGA!

ノブナガッ! comic

待たせたな

信長が、秀吉が、義元が、エッチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学艶戦姫ノブナガッ!』がここにある!!

毎月中旬
発売!!
18歳未満の方は
購入できません
18

漫画：老眼
原作：斐芝嘉和
キャラクター原案：SAIPACo.

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中！

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

女幹部メル様のセカイ征服計画！

【小説：高岡智空／挿絵：鈴眼依縫】

全国書店で好評発売中

思春期なアダム3

【人泣きの子猫【小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃】

全国書店で好評発売中

「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がす マギナ
彼女は夜の教室で……!?

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです

【小説：酒井仁／挿絵：にの子】

全国書店で好評発売中

「当方Mドレイ希望」

魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

ご主人サマ募集中!!

全国書店で好評発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー

イケない戦いの記録!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- ●仙獄学園戦姫ブブナガッ! ①〜③
- ●絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- ●BLANGEL 軸になりて踊る愚者の夜
- ●信会お嬢クリス ①〜③
- ●プリンセスリバーシ!! 交換する美姫と魔姫
- ●無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ●ビルグリムメイデン ①〜②
- ●呪詛喰らい師【カースイーター】
- ●魔海少女ルルイエルル

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL

輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!